

初期草双紙における再摺本についての一考察

——鱗形屋板の三田村本からみえるもの——

松 原 哲 子

はじめに

宝暦期から安永初年ごろに刊行された初期草双紙の体裁を大別すると、黄色い表紙の「青本」と黒い表紙の「黒本」の二種がある。この時期の両者の違いが初摺・再摺の別を意味することについては、既に諸氏^{注1}によって指摘がなされている。

拙稿「鱗形屋板絵外題考」(『近世文芸』第八十七号、平成二十年一月、日本近世文学会)では、初期草双紙の板元の中で中心を成した鱗形屋に注目し、原題簽の意匠と作中にみられる新板目録の記載を手掛かりに安永三年までの現存資料を年次的に整理した。その結果、鱗形屋板草双紙の

題簽の様式は以下のA・B・Cの順に展開することが確認された。

A 延享元年(一七四四)から宝暦二年(一七五二)ごろ

↓桐と鳳凰の一枚題簽

左側およそ四分の一に「新板」字・書名・板元商標を配し、右側の上下に鳳凰と桐の意匠を、中央に作品の一場面に取材した挿絵を配した一枚題簽。

B 宝暦六年(一七五六)ごろから宝暦十三年(一七六三)

↓「新板」字つき二枚題簽

左側に短冊型の外題簽を、右側に長方形の絵題簽を配した二枚一對の題簽。絵題簽には作品の一場面に取材した挿絵が配される。外題簽は書名の下に板元商標を、上

に楷書体で「新板」字を配す。

C 明和元年（一七六四）以降

↓干支つき二枚題簽

Bと同型の二枚題簽で、外題簽の書名の上が干支を表す絵（またはBと異なる書体で「新板」字）となつてゐるもの。^{注2}

右に挙げたうち、宝暦六年から安永元年（一七七二）までについては、青色の外題簽と紅色の絵題簽が一对のものと、紅色の外題簽と白色の絵題簽が一对のもの二種類の題簽が確認できる。表紙と題簽の両方について原裝を留めてゐる伝本の中で、明和四年（一七六七）刊『思案閣女今川』は青・紅の二枚題簽を付した青本と、紅・白の二枚題簽を付した黒本の二種が現存する。これら二種の伝本の存在は、二つの題簽の様式のうち、前者が初摺本、後者が再摺本のものであることを証明するものである。

よつて、少なくとも宝暦六年以降に新板物として刊行された鱗形屋板草双紙については、それらが後に再摺・再販売された際には、表紙と題簽の色を変更することによつて、初摺の新板物との区別がなされたものと推定される。

では、これらの再摺本はいつ、どのように刊行されたものなのか。

現存する草双紙をみると、時折何度も繰り返し摺られたために板面が摩耗し、印刷が不鮮明なものに遭遇する。それらの伝本が昔話を題材としていたり、浄瑠璃の抄録物であつたりする場合には、毎年刊行された新板の草双紙の中でも、初摺の時期を過ぎても商品としての価値が下がらないものが再摺の対象として選ばれたのではないかと想像をめぐらす。実際、元々鱗形屋板であつたものが他の板元の手に渡ることによつて長年刊行されたと推定される草双紙については、作品の内容に何らかの傾向があるようにも思える。

しかし、現存する鱗形屋板の原題簽の悉皆調査によつて初摺と再摺とを分類・整理した結果をみると、再摺の題簽を有する作品に、際だった特徴があるように感じられなかった。表紙・題簽の色は初摺本と異なるものの、新板目録も題簽の干支の意匠も初摺のままで刊行されることの多い再摺本は、その刊行時期を判断する材料が乏しく、その実態を明らかにすることは、甚だ困難だといえる。

そこで本稿では、まず鱗形屋板の初摺・再摺両様式の題簽の分布を確認し、再摺の対象となつた範囲を概観する。

さらに、宝暦六年以前に初摺本として刊行がされた鱗形屋板の、後に再摺された時の題簽の様式に注目して、再摺の時期についても考察する。その上で、草双紙の享受を考え

る上で重要な手掛かりと見込まれている「三田村彦五郎」他署名の、いわゆる「三田村本」を取り上げ、この問題について検討を加えてみたい。

一 後摺の対象

鱗形屋板草双紙において、再摺する際の基本的な方法は、表紙と題簽の色を再摺仕様に変えることである。

現存する資料をみると、刊年によつて多少の差はあるものの、かなりの割合で再摺本（もしくは再摺本体裁の原題簽）が確認できる。

例えば、宝暦七年（一七五七）の新版目録に掲載される十四種中、現在十種の存在が確認されるが、そのうち六種で再摺体裁の伝本が存在する。

宝暦七年（丁丑）「丑正月新版目録」掲載書目十四種

● 実盛本末記

大塔宮／熊野篠繫

× 山本勘助／軍配図

家内儀魔離

● 弁慶分身石

※ ● 再摺本あり

× 伝本なし

● 延喜聖代／鉢敲監鯨

龜山曾我／念力岩

● 弥陀次郎／踊大文字

伏見夜船／沖津白波^{注3}

× 元木阿弥手柄噺

× 油やほそめ小買久持／思妖競

● 福陞／萬穀題

役者名物／略姿

× 浮世／めつけゑ

宝暦七年以降についても、明和七年（一七七〇）までは概ね同じような割合で再摺本が確認される。現存の伝本から判断する限り、初摺の新版物の中で、とりわけ商品価値が保持できそうなものを選んで再摺したという印象は受けにくい。

二 再摺の時期

先述の通り、鱗形屋板草双紙は延享期から宝暦初年までの初摺本に鳳凰と桐の一枚題簽を用いているが、この時期の新版目録に掲載される書名を持つ伝本の中に、注目すべき様式の題簽を伴うものが存在する。

宝暦元年（辛未）「未正月新板目録」掲載書目十四種

☆ いづみ式部 ※○初摺本体裁

☆ 江嶋はんがく ☆「寿」字つき二枚題簽

○ さよひめ／領巾磨山 × 伝本なし

× 金平／鰐くま退治

× 西行勇力競

× 牛王のひめ

× 虎が石うす

○ ☆ おにひら親王

× ばけもの八百屋お七

× 獅子大わう

☆ 金平やくおとし

× これひと親王

☆ 山しな色好

× 飛驒のたくみ

宝暦二年（壬申）「申正月新板目録」掲載書目十三種

☆ ちんぜい八郎／一代記 ※○初摺本体裁

× 増補うら嶋

× 公平たから船

× 金平いせ参

☆ 女三のみや

○ × いもせ山／風流鑑

× おぼ捨山物語

× わたなべ／花いくさ

× うねめ物語

× いぶき山合戦

☆ 平安城都定

× 玉津しま

宝暦元年・二年は、新板物として刊行された際に付された題簽は、鳳凰と桐の一枚題簽だと想定される。しかし、現存する伝本の多くは紅色の外題簽と白色の絵題簽を付した黒本体裁で、これは再摺の際の様式にあたる。現存する兩年の二枚題簽は全て紅・白の再摺仕様のものであり、青・紅の初摺仕様のものは見受けられない。よって、これらの二枚題簽は、一度鳳凰と桐の一枚題簽を付して宝暦元年・二年に初摺の新板物として刊行したものを、後に再摺する際に、新たに作成されたものと推定される。

また、宝暦元年の新板物の再摺本には全て「寿」字を配した二枚題簽が付され、翌宝暦二年新板物の再摺本には全て「富」字が配した二枚題簽が付されているということは、それぞれ同年刊行の分を同時期にまとめて再摺したことを

示しているものと考えられる。よって、特定の作品が、板面が摩耗するほど繰り返し、長年に亘って刊行された等とは異なる再摺の実態が存在していたものと推察される。だとすると、宝暦二年以降の、二枚題簽使用期の鱗形屋板草双紙についても、毎年の新板物を一括で再摺し、販売していた可能性を考えてみる必要がある。

また、「寿」字・「富」字両種の再摺仕様の題簽は、共に二枚題簽である。よって、これらの再摺本の刊行時期としては鱗形屋板の新板物が二枚題簽様式で販売されていたことが想定される。現時点で、宝暦三・四・五年刊の初摺本が見出せず、当時の題簽様式が確認できないため、刊行時期を絞り込むことはできない。ただし、宝暦元年刊行の新板物の再摺については、翌年の初摺体裁が鳳凰と桐の一枚題簽であるので、少なくとも宝暦三年以降だと推定される。また、後述の三田村本の伝存状況を考慮すると、さらに時期が下るものと想定される。

三 三田村本にみる鱗形屋板初摺本・再摺本

草双紙の享受のあり方を探る上で注目されるものとして、三田村某と署名の残る、いわゆる「三田村本」の存在がある。大部分は「三田村彦五郎」という人物によって署名が

なされているが、他に「熊三郎」「よね」等の名も見え、三田村本とはその一群を指す。

三田村本については木村八重子氏をはじめ、神楽岡幼子氏や佐藤悟氏等によるいくつもの指摘がある。^{注4}

『草双紙の世界 江戸の出版文化』（木村八重子著、平成二十一年、ペリかん社）では、三田村彦五郎について以下のように解説がなされている（九六頁）。

見返しその他に「此主三田村彦五郎」などと名を記した作品が多数有る（中略）年月を記したものもあるの
で、この所蔵者が宝暦末明和初年刊行当時の人と推定
できる。達筆だが筆遣いに幼さも見えて草双紙好きの
少年像が目につかぶ。

管見の三田村本についてみると、署名に年月が付記される例は以下の通りである（板元名のないものは全て鱗形屋板）。

〔宝暦十一年／此主彦五郎〕

（〔鳴神上人巖注連〕）

〔宝暦十一年本主彦五郎〕〔巳正月新板／三田村彦五郎〕

（〔初夢福人八景〕）

〔巳正月新板／三田村彦五郎〕

（〔良門峯起軍〕）

〔宝暦十二壬午年／三田村彦五郎／四月〕

〔『八重桜倭譚』〕

〔宝暦十二壬午歳三田村彦五郎〕

〔阿部清明／哥うら伝〕

〔宝暦十四甲申歳正月十日此主三田村彦五郎〕

〔『現金かけねなし／釣竿の由来』鶴屋板〕

〔明和元年申七月申七月十三日／此主 三田村熊三良〕

〔『沖石水魚筆始』〕

〔申三田村〕

〔『熊坂誕生記』〕

〔明和二乙酉歳／本主三田村氏〕

〔『婦人業平／操杜若』〕

〔明和四丁亥歳／正月七日／此主三田村彦五郎〕

〔『八瀬釜本／京白粉紀原』〕

〔明和四丁亥歳／正月七日／三田村彦五郎〕

〔『凱音坂東武者』〕

〔明和四丁亥歳正月廿二日／三田村彦五郎〕

〔『思案閣女今川』〕

右のように、年月の付記されたものだけに限ると、宝暦十一（一七六一）年から明和四年（一七六七）までの七年間に亘っている。

実際に三田村彦五郎が草双紙を入手した時期はいつごろ

なのか。三田村本の中でも刊年や初摺・再摺の別が比較的容易に推定できる鱗形屋板に限り整理してみると、以下の通りになる。^{注5}

三田村本鱗形屋板黒本青本一覽

◎印は初摺本の体裁、●印は再摺本の体裁の伝本。

「刊年不明」とあるものは新板目録や題簽の様式によって刊年を確定できないもの。ただし、他の伝本の形態や、署名に付記される年月によって刊年が絞り込める場合は、適宜ふさわしいと思われる順に配置した。

「↓」の後に表紙・題簽の様式および所蔵先を示した。三田村彦五郎の署名については「三田村彦五郎」「本主彦五郎」「此主彦五郎」等の氏名のみを記したものについては省略し、他の人物の署名や、年月日等を付記したものについては示した。

●刊年不明 『佐々木三郎／藤戸問答』(二卷)

↓黒本（原題簽欠。ただし、鳳凰と桐の一枚題簽を伴う伝本があり、宝暦初年までの新板物であったと推定される）【南山大】

●宝暦元年 『江嶋はんかく』(三卷、甚四作)

↓黒本（紅白「寿」字の二枚題簽）【ロンドン大】

●宝暦二年 『平安城都定』^{注6}(三卷、鳥居清満画)

● 黒本（紅白「富」字の二枚題簽）【関西大】
↓ 黒本「山椒大夫／老花婿」（三卷）

● 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）【関西大】

● 宝暦七年「弥陀次郎／踊大文字」（三卷）

↓ 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）【関西大】

● 宝暦七年「実盛本末記」（五卷）

↓ 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）【ロンドン大】

● 宝暦七年「福隄／萬穀颯」（二卷、鳥居清満画）

↓ 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）【南山大】

● 宝暦七年「伏見夜船／沖津白波」^{注7}（三卷）

↓ 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）「十一月十八日 本主彦五郎」【早稲田大】

● 宝暦七年「延喜聖代／鉢敲監觸」^{注8}（三卷）

↓ 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）【南山大】

◎ 宝暦八年「分福／丹頂鶴」（二卷、鳥居清満画）

↓ 青本（紅色、外題簽のみ存、「新板」字）【南山大】

● 宝暦八年「伊豆御山／旭椰葉」（三卷、鳥居清満画）

↓ 黒本（紅白「新板」字の二枚題簽）【関西大】

◎ 宝暦十年「草木国土／歌囊蛙鷺」^{注8}（三卷）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「彦五郎／此本八冊之内何方へ参候共かへし給□□候

（可被下候力）」

◎ 宝暦十年「佐野本領玉恋掣」（三卷、鳥居清満画、甚四作）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「彦五郎」
「三田村彦五郎」の他に下巻裏表紙「八冊

／熊□（印カ）」

◎ 宝暦十年「達磨出生記」^{注9}（三卷）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】

◎ 宝暦十年「穴野名寄／嫁狐和名」（二卷）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】

◎ 刊年不明（宝暦十一年カ）「鳴神上人巖注連」（三卷）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「彦五郎／三田村氏／よね」
「宝暦十一年／此主彦五郎」等

◎ 刊年不明（宝暦十一年カ）「初夢福人八景」^{注10}（二卷）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「宝暦十一年本主彦五郎」
「已正月新板／三田村彦五郎」等

◎ 刊年不明（宝暦十一年カ）「良門峯起軍」（五卷）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「已正月新板／三田村彦五郎」等

◎ 宝暦十二年「八重桜倭調」^{注11}（二卷、鳥居清満画）

↓ 青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「宝

曆十二壬午年／三田村彦五郎／四月」等

●刊年不明（宝曆十二年再摺力）『阿部清明／哥うら伝』（五卷）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【南山大】「宝曆十二壬午歳三田村彦五郎」等。

◎宝曆十三年『沖石水魚筆始』（三卷、鳥居清満画）

↓青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】「明和元年申七月申七月十三日／此主 三田村熊三良」等

◎刊年不明『百魔／山姥有明月』（三卷）

↓青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【関西大】

◎刊年不明『三官／和唐内雅立』（二卷）

↓青本（青紅「新板」字の二枚題簽）【南山大】

◎刊年不明『平重盛小松號』（三卷）

↓青本（青紅二枚題簽）【関西大】

●刊年不明（明和元年カ）『熊坂誕生記』（二卷）

↓黒本（紅色、外題簽のみ存）【南山大】「申三田村」等。

◎明和二年『婦人業平／操杜若』（二卷）

↓青本（青紅、諫鼓の図の二枚題簽）【関西大】「明

和二乙酉歳／本主三田村氏」等

◎明和四年『八瀬釜本／京白粉紀原』『凱音坂東武者』

『思案閣女今川』^{注12}

↓青本（青紅、先掲のものとは別種の「新板」字つき二枚題簽）【大英図書館】「明和四丁亥歳／正月七日／此主三田村彦五郎」他（前掲）

●刊年不明『源氏朧月』（三卷、鳥居清満画）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【関西大】

●刊年不明『住吉陰陽／岸姫松』（三卷、鳥居清信画）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【関西大】

●刊年不明『ものぐさ太郎』（二卷）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【南山大】

●刊年不明『本朝／角力物語』（二卷）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【南山大】

●刊年不明『結城合戦』（三卷）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【南山大】

●刊年不明『大ふくてう』（二卷）

↓黒本（白色、絵題簽のみ存）【南山大】

●刊年不明『にし木戸合戦』（三卷、甚四作）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽）【南山大】

●刊年不明『大原／雑居寝物語』（三卷）

↓黒本（紅白「新板」字二枚題簽、）【ロンドン大】

「三田村氏」「平井甚之助様／此主彦五郎」等

●刊年不明『そが一代記』（五巻）

↓黒本（幅狭宝尽一枚題簽）【南山大】

●刊年不明『澤田物語』（三巻）

↓黒本（原題簽欠）。ただし、幅狭宝尽一枚題簽の伝

本あり）。【関西大】

刊年不明『女はちの木』（二巻、鳥居清信画）

↓赤本（一枚題簽、狂言絵尽）【大英博物館】

各作品の初摺での刊年を基準にすると宝暦元年から明和四年まで十七年間に亘っていることを確認できるが、宝暦七年までのものについては全て再摺本であり、実際の刊行年や三田村彦五郎の入手時期はそれよりも下るものと推察される。右に挙げた一覧のうち、再摺本と、初摺であつても刊年が特定できないものを除くと、宝暦八年から明和四年の十年間に刊行されたものが確認される。よつて、三田村本とされる草双紙群が実際に刊行された年代として想定されるのは右の十年間程度であると考えておきたい。

ただし、この十年間をそのまま三田村本の鱗形屋板初摺り・再摺の刊行年代と速断することはできない。

初摺本にみえる署名の内、年月が付記されたものを挙げると以下の通りである。

◎ 宝暦十二年『八重桜倭詞』

↓「宝暦十二壬午年／三田村彦五郎／四月」

◎ 宝暦十三年『沖石水魚筆始』

↓「明和元年申七月申七月十三日／此主 三田村

熊三良」

◎ 明和二年『婦人業平／操杜若』

↓「明和二乙酉歳／本主三田村氏」

◎ 明和四年『八瀬釜本／京白粉紀原』『凱音坂東武者』

『思案閣女今川』

↓「明和四丁亥歳／正月七日／此主三田村彦五

郎」他（前掲）

右のように、『婦人業平／操杜若』『八瀬釜本／京白粉紀原』『凱音坂東武者』『思案閣女今川』の四点については初摺の新版として刊行がなされた年の署名であるが、『八重桜倭詞』は正月を過ぎた四月の署名となつている。また、『沖石水魚筆始』については翌年七月の日付が付されている。このような新版刊行と署名の時期の差異は、草双紙を購入した時期が下ることを意味するののか、それとも購入した時期は正月ごろで、それが本人の手に渡ったのが遅れたことを示すのかなど、その経緯について検討する必要がある。

三田村本の年代特定については、今後も精査する必要があるが、宝暦初年刊行分の『江嶋はんかく』および『平安城都定』が明らかに宝暦三年以降の再摺本の様式であることから考えて、その上限は宝暦八年よりも大きく遡らないものと推測される。また、干支つきの二枚題簽を使用した明和期の鱗形屋板の再摺本も三田村本にはみられないので、明和四年より大きく下ることもないものと推定される。よって現時点では宝暦後期から明和初期までを三田村本の想定範囲としたい。

結語

以上のように、本稿ではまず、現存する鱗形屋板原題簽の総数に占める再摺様式の割合を示すことよって、同年刊行の新板物が一括して再摺された可能性について検討した。また、いわゆる三田村本草双紙を初摺・再摺に分類し、その年代が宝暦後期から明和初期までの範囲に絞られる見込みであることについて取り上げた。

同年刊行分の一括再摺の可能性について、今一度三田村本を対象に検討してみたい。宝暦七年の新版物の再摺本が五点十六冊みられる。これら五点の購入・入手時期が明らかでないので想像の粹を出ないが、初摺本が販売された後、

さほど経たない時期に、再摺本が十数点並ぶ中からめぼしいものを選び、一括購入できるような状況があったのかも示れない。

草双紙の享受のあり方を考える上で、再摺本の存在は看過できない重要な問題である。今後は鶴屋や山本といった他の板元の再摺の方法や、一括再摺以外の再摺本刊行のあり方などをひとつずつ明らかにし、草双紙享受の実態解明に取り組んでいきたい。

注1 棚橋正博氏「草双紙の時代(6)初めは青、再板は

黒」(『日本古書通信』平成七年六月)、木村八重子氏「赤小本から青本まで——出版物の側面——」(『新日本古典文学大系』草双紙集)解説、平成八年、岩波書店、神楽岡幼子氏「青本黒本集」解題(『関西大学図書館影印叢書』第一期第七卷、平成九年)等。

2 安永二年のものだけは二枚題簽様式を意識した一枚題簽となっている。拙稿「鱗形屋板絵外題考」参照。

3 早稲田大学図書館所蔵。雲英末雄・伊藤善隆・二又淳「伏見夜船／沖津白波」『勅宣養老水』影印・翻刻(『早稲田大学図書館紀要』第四十八号、平成十三年三月)参照。

4 木村八重子氏「赤小本から青本まで——出版物の側面」、

神楽岡幼子氏「関西大学所蔵初期草双紙について」（関西大学図書影印叢書第一期第七卷『青本黒本集』、平成九年、関西大学出版部）、佐藤悟氏「草双紙に関するいくつかの疑問」（『江戸文学』第三十五号、平成十八年十一月）等。

5 鱗形屋板以外の例を挙げると以下の通り。

『菊水軍法錦』（二巻、鶴屋）

↓黒本（白色・一枚題簽）【関西大】

『木曾一代記』（五巻、鶴屋）

↓黒本（紅色・一枚題簽）【関西大】

『ほう命丸白狐玉』（三巻、鶴屋）

↓黒本（赤色・一枚題簽）【南山大】

『陸奥源平／武勇問答』（二巻、丸小）

↓青本（色摺一枚題簽）【関西大】

『新板蛙合戦多づくし』（三巻、山本）

↓黒本（紅色・幅狭一枚題簽）【関西大】「八冊／熊

□」「此主彦五郎」等。

『勅宣養老水』（二巻、山本）

↓青本（色摺一枚題簽）【早稲田大】

『建武軍記』（上巻一冊、奥村）

↓黒本（墨摺一枚題簽）【実践女子大】

6 木村八重子氏「黒本青本解題稿（一）」 関西大学所蔵稀書、三田村彦五郎本など「一」に影印・解題所収（書

誌学月報」第五十二号、平成五年七月、青裳堂書店。

7 注3に同じ

8 木村八重子氏「黒本青本解題稿（三）」 関西大学所蔵稀

書、三田村彦五郎本など「一」に影印・解題所収（書

誌学月報」第五十七号、平成八年四月、青裳堂書店。

9 木村八重子氏「黒本青本解題稿（二）」 関西大学所蔵稀

書、三田村彦五郎本など「一」に影印・解題所収（書

誌学月報」第五十四号、平成六年一月、青裳堂書店。

10 『草双紙の世界』に解説がある。

11 『草双紙の世界』に署名部分掲載。

12 『八瀬釜本／京白粉紀原』『凱旋坂東武者』『思案閣女今

川』が合綴される。

（まっぴらのりこ・実践女子大学非常勤講師 実践女子大学大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学）